

# 異文化と接触するとき

— 留学生はどう対応しているのか —

金 田 智 子

## 1. はじめに

異なる文化に接した時、人は予期せぬさまざまなできごとに出会う。ある人がそれまで属していた文化と新たに属することになった文化との間にある何らかの差によって誤解が生まれたり、それが摩擦となって当事者間の関係に否定的な影響をもたらしたりすることが多いのは周知の通りである。しかしながら、誤解や摩擦に関与した者の一方がそのことに全く気がつかない場合、気がついてその原因が文化の違いによるものではないかと思いを巡らすことができない場合、などがある。誤解を誤解として捉えられない時や摩擦の原因を十分に考察できない時、つまり誤解や摩擦の解消が行われていないと、異文化に対する理解や適応は進まない。その結果、言い換えれば、誤解や摩擦が積み重なるままにしておくことによって、日本の生活になじめず留学の本来の目的を達成することができなくなるような学生もいる。

日本に学ぶ留学生に関わる者として、誤解や摩擦をそのまま放置してしまわないような指導を考えなくてはならないが、その具体的な指導方法について考える前に、留学生たちが実際にどのように異文化に触れ、それらに対応しているのかを知る必要がある。留学生が日々の暮らしの中で、どう「異文化」を処理しているのかを明らかにしなくてはならない。

熊谷（1995）は異文化間誤解および摩擦を、相手や自分の行動についての解釈、くい違い、認識の有無、という観点から検討する方法について述べている<sup>1</sup>。本稿では、この観点を参考にその次の段階である誤解への対応、つまり異文化接触による誤解や摩擦を経験した時に日本で学ぶ留学生がどう対応しているのかに焦点をあてて異文化適応の問題を考える。

## 2. 異文化接触時の対応

箕浦（1984）はアメリカで成長する経験を持った日本人子弟のアメリカ文化への同化度のタイプとして、以下の五種をあげている。

- I. 日本人とアメリカ人の対人関係の持ち方が違うという認知がないタイプ
- II. アメリカ人と日本人の行動は異なるという認知はあるが、アメリカ人のようには振

舞えないか、振舞おうとしないタイプ

III. 認知・行動面はアメリカ的だが、感情の動きは日本的であるタイプ

IV. 認知・行動面はアメリカ的だが、心情面はどちらなのか未分化なタイプ

V. 認知・行動・感情すべての面でアメリカ的なタイプ (p.225)

これは、子どもの人格形成過程においてのアメリカ文化への同化度をタイプ分けしたもののだが、すでに青年期に達している外国人留学生在が日本という異文化に接触した時の対応のあり方に置き換えて考えることも可能である。つまり、

- (a) 自国人と日本人の対人関係の持ち方（あるいはコミュニケーションのしかた）が違  
うという認知がない
- (b) 自国人と日本人の行動は異なるという認知はあるが、日本人のように振る舞えな  
いか、振る舞おうとしない
- (c) 認知・行動面は日本的だが、感情の動きは自国的である
- (d) 認知・行動面は日本的だが、心情面はどちらなのか未分化
- (e) 認知・行動・感情すべての面で日本的

以上の5タイプである<sup>2</sup>。この中で、(a)(b)のタイプは対人的な摩擦を、(c)(d)のタイプは内的な摩擦を生む可能性があるとして予想される。

異文化適応のプロセスの捉え方にはAdler (1975) が異文化社会に置かれた個人とその社会との関わりという視点で紹介した五つの段階 (Contact, Disintegration, Reintegration, Autonomy, Independence) などがあり、日本という異文化社会において留学生在がどのような段階にあるのかを考えると参考になる。

また、横田 (1997) はピアジェの発達理論における「同化」と「調節」の概念を用いて異文化適応のプロセスを図1のように示している。

この中で、Cの段階、つまり母文化の枠組みと分化の進んだ異文化の枠組みとが新たなアイデンティティを形成し、それによってさまざまな異文化接触の場面にうまく対処できるようになることが「異文化適応」であると考えられる。そして、そのCの段階に至るまでのAおよびBの段階で経験する「不快・不安」「疑問・好奇心」の処理方法にはさまざまなものがある。その方法如何によっては、大きな摩擦を生みだし、日本での生活を難しくしてしまう。留学生在がCの段階に至るように導くためには、まず、彼らが実際に「不快・不安」「疑問・好奇心」をどう処理しているのかを知る必要がある。

箕浦は異文化適応を一人一人の人間が異文化にどの程度適応しているか、あるいは同化しているかを認知、行動、感情の三つの側面から捉え、Adlerは異文化社会との関わり方という視点で個人の異文化適応を捉え、横田は適応を人間発達のプロセスという観点から考察している。しかしながら、これらはいずれも一つ一つの異文化接触場面で人々が実際に

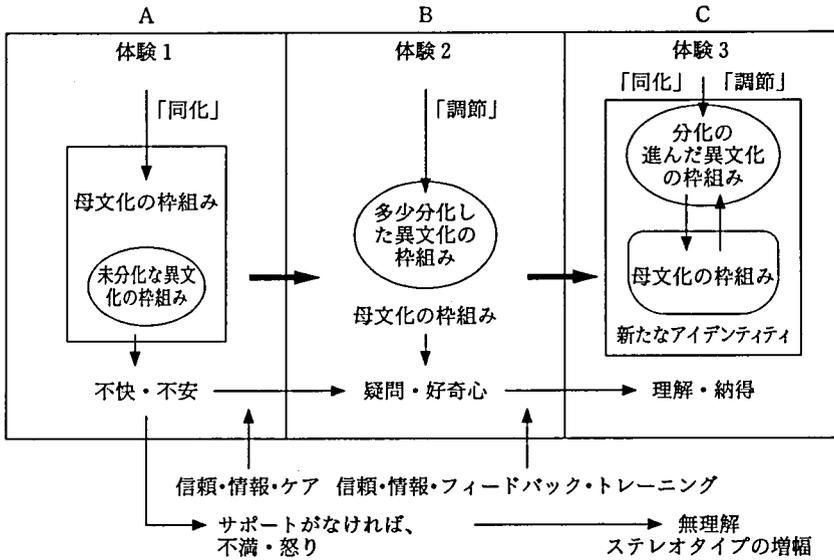


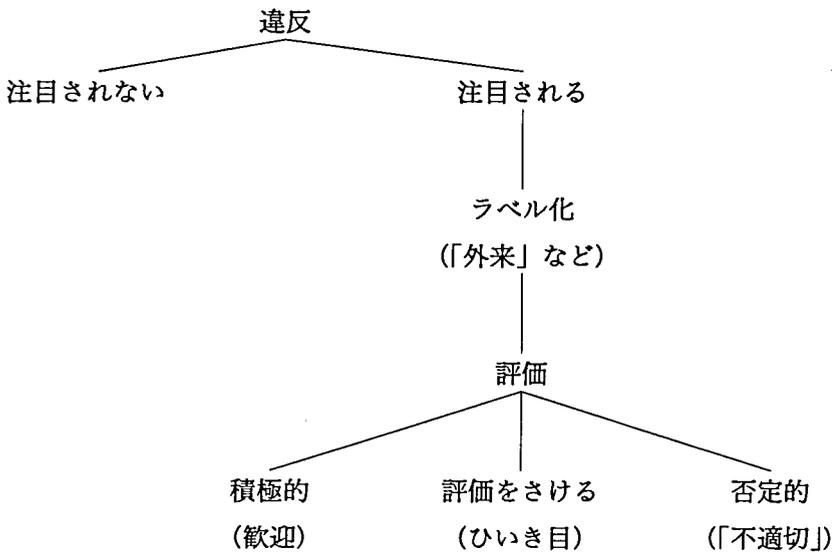
図3-1 適応の内的発達モデル

注) 分化とは、母文化(原文のまま)と異文化の分離の意味だけではなく、その異文化の枠組みがどれほど詳細かつ適応的になっているかということも意味する。

<図1> 適応の内的発達モデル (横田1997, p.71より)

どう対応しているのかを示すものではない。

ネウストプニー (1982) は外国人のルール違反に対する反応および評価について以下のような枝分かれ図を用いて説明している。



<図2> 外国人のルール違反への反応 (ネウストプニー1982, p.18より)

ネウストプニーが言う外国人のルール違反に対する反応の中で、外国人と日本人とのコミュニケーション上、特に問題となるのは否定的な評価がなされた場合である。彼は否定的な評価の代表的な形として以下の四種類を紹介している。

- a. 表面化せずに、将来の考察のために記憶にとめておく。
- b. 不快な自分の気持ちを表現する。例えば、顔の表情を変える、直接「イヤダ」と言う。
- c. 違反の訂正を求める。
- d. 物理的な制裁をする。例えば、将来のつき合いを拒む。(pp.22-23)

ネウストプニーが述べているのは、外国人がルール違反を侵した場合にホストカルチャーの人間がどう評価するのか、である。つまり日本で外国人が日本のルールに合わないことをし、それが否定的に評価されたときに、日本人がどのような対応をするのかに注目しているのである。では、逆に外国人の側から「ルール違反」を見たらどうなるのだろうか。日本に滞在する外国人にしてみれば、自文化で成長する過程で身につけたルールに合わないことを日本人とのコミュニケーションの中で経験すれば、それは彼らにとってのルール違反である。日本に滞在する留学生が自分の持つ文化と異なるルールに接したときに、どう反応・評価し、対応しているのか、以下、留学生が実際に体験したことをもとにそのパターンを明らかにしたい。

### 3. 対応の実際

留学生が実際に誤解や摩擦にどう対応しているかを述べる前に、ここで誤解とは何を指すのかを定義しておく。杉戸他(1992)はその研究の当面の対象として、異文化間の誤解を以下のように規定しており、本稿でも同様の規定の下に誤解について考えていく。

- ①言語aの話者Aと言語bの話者Bの間に
- ②A(ないしB)の行った日本語による言語行動をめぐって
- ③行動主体A(B)の広義の行動意図と、行動相手B(A)のその受容との間に
- ④差異(くいちがい、ずれ、逆転、過剰、不足など)が生じた。(p.56)

広島大学に学ぶ外国人留学生10名に、「日本で、あるいは日本人とコミュニケーションをした時に経験した誤解や摩擦を思い出して三人称で記録する」という課題を出し、それぞれの経験を振り返ってもらった<sup>3</sup>。この質問に至るまでに、異文化間コミュニケーションの関連書物に出ている事例のなかからいくつかを紹介し、自分の経験を振り返るきっかけを与えておいた。

実際に集まった事例は40例である。いずれも誤解、あるいは摩擦が起こったことを認知しているのだが、その対応はさまざまである。その対応のパターンを以下のように分類する。

(1) 誤解が起こった時点での対応

- ①放置するが記憶には残る
- ②自分で解釈・理解に努める
- ③解釈を他者に求める
- ④不快になるが何もしない
- ⑤うまくやりかえす／切り抜ける
- ⑥不平を言う／不快な気持ちを表現する

(2) 誤解を経験した後の対応

- ①納得し、不快な感情はなくなる。
- ②不快な気持ちを抱き続ける
- ③同様の摩擦を回避する

誤解への対応は、その誤解が起きたその瞬間の反応およびそれに関する解釈までの対応と、誤解を経験した後、つまり誤解を経験して一呼吸おいた後の状態や対応の二段階に分けられる。以下、それぞれの対応について代表的な例をあげながら述べる。

(1) 誤解が起こった時点での対応

①放置するが記憶には残る

何か誤解が起こったようだ、あるいは自分の視点から見てルール違反が相手によってなされたということはわかったのだが、それについての考察は特にせず、それでも記憶には残っている、というものである。誰かに説明を求めるような積極的な行動には出ない。

事例13. Aさんが日本人の友達Bさんと話していた6年前のことです。Aさんが恋人がどんなに格好いいかを話していたら、Bさんが「ごちそうさま」と突然言いました。Aさんはどうしてボーイフレンドの話の途中でBさんが食事を終わったときのあいさつをしたのかと全然理解できませんでした。

この学生はこの記録を書くまで、自分自身が理解できなかった事柄について、その時の状況も聞き取ったことばもはっきりと覚えているにも関わらず、誰にも聞かないでそのままにしていた。しかし、この学生が疑問に思ったことは、誰かに説明してもらえばすぐに理解できそうな事柄である。また、文中のBさんはAさんがBさんのことばを理解できなかったということを知っているとは考えられない。

## ②自分で解釈・理解に努める

日本人とのコミュニケーションを通じて、ふと疑問に思ったこと、驚いたことなどについて自分なりの解釈をしてみるというものである。

事例26. この誤解は去年の秋、東京で私とお婆の間で起こった誤解です。私はA国に住んでいたときから髪を様々な色にしてきました。茶色や赤茶やブロンドの髪に挑戦してきました。しかし、去年お婆の家に遊びに行ったとき、お婆はこう言いました。「エミリーちゃん、日本でそんな色の髪をしていたら遊んでいる女の子に間違えられるよ。」たまたま、その時の髪は自分でもちょっと明るいかと思っていましたが、お婆に言われてちょっとびっくりしました。A国に留学したことがある、ふだんはオープンなお婆に注意されたことについてもびっくりしましたが、そんな風に外面で人の性格を判断する日本社会に対してもっとびっくりしました。

でも、後で考えてみたら、日本社会とA国社会との違いは無くても、年配の世代対若い世代の違いだけでも知れません。私のお婆は48才ぐらいで、そんな世代の女性から見ると髪をあまり明るく染めると水商売の女性のイメージがまだ残っています。しかし、若い世代の日本人は私の目から見ると、いろいろな髪型や髪の色に挑戦しているようです。

この学生は日本人であるお婆のことばに驚いたが、生じた誤解に対して自分なりに解釈をし、まず社会の違いにその原因を求め、次に世代の違いへと視点を移している。「びっくりしました」という感情の動きにとどまってしまうわずに、どうしてお婆からそういうことばが出てくるのかをいくつかの視点から捉えてみるということをしているのである。

## ③解釈を他者に求める

気になった事柄を自分で解釈してみるのではなく、他の人にそれを求めるというものである。当該コミュニケーションの相手に直接説明してもらおう場合もあるが、コミュニケーションが終了してから第三者に説明を求める場合もある。

事例10. はじめてAさんが日本の高校の卒業式に出席したのは4年前でした。3月でまだ雪が降っていて、体育館は非常に寒かったです。外と中の気温は差があまりなく、4度ぐらいだったでしょう。寒くて、寒くて、先生方は「はやく終わってほしい」と文句を言いました。Aさんも早く職員室に戻りたかったです。

開会して5分たったとき、司会者は「イチドキリツ」と言いました。それから、もうすこしたら、また司会者が「イチドキリツ」と言いました。Aさんは「ああ、司会者が言い間違った」と思って立ちました。しかし、四回、五回、六回まで司会者が「イチドキリツ」と言いました。それがAさんには少し気になってきました。「座って体がちょっとあたたかくなると、イッカイキリツを聞かされる。何回も何回も立たせて、体があたたかくなれないよ。」とAさんは思いました。

卒業式が終わってから、Aさんは国語の先生にどうして何回も「イッカイキリツ」をさせられたのか聞いた。先生はイチド（一度）とイチドウ（一同）の違いを説明してくれて、Aさんは恥ずかしく笑いました。

これは誤解を放置してしまった先述の事例13とは対照的に、疑問に思ったことを他者に問うことにより、自分の誤解の原因に気付き、日本語のことばの意味を理解し納得した例である。前述の「②自分で解釈・理解に努める」という方策をとっていたら、「イチドキリツ」は「イチドウキリツ」の聞き間違いだということにも気付かずじまいたったという可

能性もある。また、②であげた事例26のような場合でも、他者に解釈を求めることにより、より多面的なものの見方ができる可能性があるだろう。

#### ④不快になるが何もしない

日本人とのコミュニケーションによって、明らかに不愉快な気持ちを抱いても、それを表現しないというものである。ネウストプニーの「a. 表面化せずに、将来の考察のために記憶にとめておく」にあたるものである。

事例39. AさんはB国からきた20歳の女性である。Aさんは友達である30代の日本人男性Bさんに遊びに誘われた。Aさんはその日、用事があったので、Bさんに「すみません。ちょっと用事がある。」と断った。BさんはAさんに「どこへ行くの」と聞きつけた。Aさんは用事があると言ったのにどうしてBさんが自分のことを構うのかなと思って不満だったし、いやな気持ちにもなった。

この学生は「どうしてBさんが自分のことを構うのかな」と思っているのだが、特にそのことについての解釈をしようとするわけではなく、相手にもその気持ちを表明しない。ただ「いやな気持ち」になるだけである。この「いやな気持ち」が積もり積もって、大きな摩擦の原因となる可能性がある。

#### ⑤うまくやりかえす／切り抜ける

学生の中には、多少不快になりつつも、コミュニケーションの相手に正しい知識をそれとなく与えるなどの方法をとって、その場を切り抜けている者もいる。

事例19. この間、日本人の大学生に「アメリカの英語でしゃべるん？それともイギリスの英語でしゃべるん？」と聞かれました。僕はどちらもしゃべりません。これは、僕は英語が話せないということでしょうか。ちなみに「C国の英語でしゃべる」と答えました。

事例23. いつ：土曜の夕方  
どこで：国際交流のパーティー  
Aさん：日本人の学生、女。  
Bさん：D国人の留学生、女。

両者の関係：Aさんは初めてBさんに会って、話をしていました。

起こったこと：AさんとBさんは食べながら話していました。Aさんは驚いた顔で、「えっ、おはし使えるんですか」と聞きました。Bさんがこんなことを言われるのは初めてではありませんでしたが、すこし腹が立ちました。「なんで、そんなこと聞くんですか。当たり前でしょ。日本でおはし使えなかったら困るでしょう。」と言いたかったのですが、もちろんそう言うてはいけないので、笑い飛ばして「使えますよ」と答えるしかなかった。

原因：日本人じゃなくてもおはしの使い方がすぐ覚えられるということがわからなかったのでAさんはあんな質問をしたと思います。

以上の二つの例は、日本人の外国人に対する理解が不十分であるために起こった摩擦だ

が、留学生はいずれも相手の知識または理解不足をはっきり指摘することなく対応している。前項の「何もしない」のような消極的なものではないが、次の「不平を言う」ほど相手に自分が感じたことをはっきり伝えているものでもない。

#### ⑥不平を言う／不快な気持ちを表現する

留学生の中には、日本人のことばや行動によって不快な気持ちになった場合に、がまんせずに自分の気持ちを相手に伝える人もいる。ニューストブニーの言う「b. 不快な自分の気持ちを表現する」にあたるであろう。同時に「c. 違反の訂正を求める」場合や、不快な気持ちを表現することによって違反の訂正を求める場合もあろう。

事例16. おととしの冬、広島に来てスキー場でバイトをしました。そのとき、「もうすぐ」というのがどういう意味かはっきりわかりませんでした。ある日、僕が休憩をしていたとき、上司が僕に「もうすぐ皆で第一リフトに行く」と言いました。僕は「もうすぐ」というのは「今すぐ」という意味だと思って、そのとき昼ごはんを食べているところだったので、ちょっと上司のことを怒ってしまいました。でも、上司は優しく、「もうすぐ」の本当の意味を教えてくださいました。

事例29. この誤解は去年私がA国から広大に留学したばかりの時のことです。大阪に住んでいるおばが広大の国際交流会館に毎晩電話してきました。そして、私がたまたま留守をしているといつも留守電に「どこを出歩いているの、もう遅いのに。」と入っています。私は両親でもないのに毎晩電話をかけてくるのがもう迷惑だったので、やめてくださいと頼んだのですが、また驚くべきことに叱られました。「エミリーのこと心配して電話したのに」。(後略)

事例16は不平を言うことにより、自分があることばについて誤解していたことを知らされ、不快感を抱き続けずに済んだという例である。また、事例29では、自分の気持ちを伝えることが結局は叱られるという結果を導いたとはいえ、おばの「エミリーのこと心配して」ということばを引き出すきっかけとなっている。そして、この例についての記述は以下のように続く。

事例29. (前略) 私ははじめ、おばの電話がおせっかいだと思いましたが、これもまた文化の違いかなと思いました。私の国では18歳でもう大人です。しかし、日本は20歳で正式に大人になってもいつまでも年配の人から見ると子供です。私は今21になったばかりですが、日本ではまだまだ子供かもしれません。

この学生はまず不平を言い、おばの考えも聞き、自分なりの解釈を加えるという作業を行っている。不快であるということを相手に伝えることによって、一方的あるいは感情的になりがちな解釈をより多面的、客観的にしているのである。

#### (2) 誤解を経験した後の対応

##### ①納得し、不快な感情はなくなる。

誤解に対して何らかの解釈または説明を得ることによって、「ルール違反」と思えたことを「違反」ではなく、それぞれの社会や文化が持つ「ルール」だと納得する場合である。初め不快だと思っけていても、解釈を加えることにより、否定的な感情がなくなるのである。

事例28. 3年前、大阪で同い年のA国人の友達と居酒屋にいきましたが、私達はちょっと誤解しました。飲み物と料理を注文するとすぐウェーターが小さな小皿にサラダを出しました。私達は注文しなかったのですが、居酒屋のサービスだとすっかり思い込みました。しかし、食べ終わって勘定書きを見たら、500円と書いてありました。私達はびっくりしました。勝手にウェーターが持ってきたのになぜ私達が払わなければならないのかと思いました。ウェーターに聞いたら、それは始めから払わなければならないものだと言われました。

私はびっくりしました。レストランははじめからそのことを伝えるべきだと思いました。しかし、それもまた、A国のチップのように書かれていないルールなのかもしれません。

この学生の場合、みずから「ルール」ということばを使用し、自分の母文化にも存在する暗黙のルールに照らし合わせることによって異文化体験を理解しようとしている。初めは母文化との違いにびっくりしたものの、他からの説明を受け、「レストランは～べきだ」と自分なりの考えも持ちつつ自国の事情と比較して、母文化と異文化との違いを客観的に捉えている。

## ②不快な気持ちを抱き続ける

自分なりの解釈、あるいは他者による解釈がなされても、やはり否定的あるいは不快な気持ちを消すことができない場合がある。

事例7. 日本人はご飯を食べるときよく「おいしい」という言葉をくり返す。別にそれは悪いこととは思っていないが、日本人の友達と一緒にご飯を食べると、しきりにきこえてくる「おいしい」にだんだん嫌気がさしてくる。「いただきます」というのと同じで、ただ感謝の気持ちを込めて言っているのかなとは思ったが、何となく本気ではないように聞こえてしまう。特に友達を招待したとき、「おいしい」が多すぎるとお世辞に聞こえるため、かえって、今日の料理はまずいかな、みんな私を慰めるために「おいしい」と言っているんじゃないかな、と思ってしまう。一方、友達が招待してくれた時は、「おいしい」と言うのが一番の責任のように感じてしまうために、おいしさが感じられなくなる。

事例8. ホームステイに行った時、その家族ととても親しくなった。お父さんは「もううちの娘だ」と言いながら、いつの間にかわたしのことを「あなた」から「おまえ」と呼ぶようになった。それは親切ない扱いだと自分に納得させようとしたが、「おまえ」は軽蔑の言葉というイメージがあまりに強いから、呼ばれるたびに気分が少し悪くなる。

事例11. 6年前、Aさんはゴルフ場で働いていました。いつもお客さんが「Aさん、～～お願いします」とていねいに頼みましたが、ある日、「Aさん、～～ちょうだい」と言ったお客さんがいました。日本人の友達から「ちょうだい」というのは「お願いします」ほどていねいではないと聞いて、Aさんは怒りました。「私は奴隷じゃない。そんな失礼な言い方…。」

今、Aさんはちゃんと「チョウダイ」の意味が分かっていますが、今でも言われるとどうしても気分が悪くなります。6年前に経験したことを思い出すからです。

ここにあげた三つの事例はいずれもことばに直接関わる事柄である。そして、どの留学生も気になっていることばの意味を肯定的に捉えようとしたり、気にしないようにしたりするのだが、心情的にどうしても受け入れられず、そのことばを聞くたびに穏やかな気持ちではなくなってしまう。それでも、コミュニケーションの相手に特に不満を言うわけではなく、じっとがまんし続けるのである。

事例7のように、特定の日本人あるいは特定のできごとではなく、複数の日本人とのコミュニケーションで経験したような事象に関しても、「これが日本式なのか」などという割り切り方はできず、かと言って、誰かとそれについて話し合いをすることによって多面的な見方をしたり、自分の感情を吐露することによって不快な気持ちを軽減したりするようなこともできない場合もあるのである。この状態がもう一步進み、不平を述べることもじっとがまんすることもできず、次に述べるような行動をとる留学生もいる。

### ③同様の摩擦を回避する

たとえ何らかの解釈がなされたとしても、心情的にどうしても受け入れることができず、その結果、そういったいやな思いをしないために摩擦の原因となる状況そのものを避けようとしてしまう場合がある。これは、ネウストプニーの「d. 物理的な制裁をする。例えば、将来のつき合いを拒む」に似た方策と言えよう。

事例4. D国人のBさん、24歳、日本に留学しています。昼は、学校の食堂で食事をしています。そのときいつも研究室の学生ら十人ぐらいと一緒に going しています。そのうち、一人の学生はBさんがシチューを注文すると「Bさん、シチューが好き？」と、揚げ物を注文すると「Bさん、揚げ物が好き？」と聞きます。毎日そう聞かれて、「なんで、毎日こんなつまらない話をするの？ほかに言うことがないなら何も話さなくていいんじゃないか」と思うようになりました。そして、一緒に食事に行くのをやめました。

この留学生の場合、自分の不快な感情をコミュニケーションの相手に直接伝えることなく、その不快な感情を引き起こすコミュニケーションの機会そのものを回避するようになってしまった。「なんで、毎日こんなつまらない話をするの？ほかに言うことがないなら何も話さなくていいんじゃないか」と自分なりの解釈をしているのだが、それをコミュニケーションの相手あるいは第三者に問うてみることをしなかったために、結局一面的な見方しかできず、コミュニケーションそのものを絶ってしまうという手段を選んてしまったのである。

次にあげるものは、あきらかな回避を行ったわけではないが、「回避」したい気持ちが伺える例である。

事例3. D国人のAさん、25歳、日本に留学しています。日本に来る前に、日本語の勉強を二か月しましたが、あまり話せません。日本に来た時、「いいチャンスだ。日本人と会話しながら日本語の勉強をしよう。」と思いました。しかし、日本人学生と話をする、相手が“Please speak English.”と言うのです。はじめ

は、Aさんが「やはり、私の日本語が下手なんだな。」と思っていましたが、なんどもそう言われて、ちょっと変な気持ちになってしまいました。そして、ますます日本語で話す自信を失って、さらに「日本語の勉強はいやだ、もうやめよう。」と思うようになりました。

先の事例4では一緒に食事をするのをやめたと言っているのだが、事例3では「日本語の勉強はいやだ、もうやめよう」と思ったと述べている。日本語が上手になりたいという気持ちがあるにも関わらず、日本人と会話した結果「日本語の勉強はいやだ」と思ってしまったという非常に残念な例である。

#### 4. 考察

留学生の異文化接触時における対応について考えるとき、ここで特に問題にしたいのは感情的な側面である。「3. 対応の実際」の中で、異文化接触によって引き起こされた不快な感情を処理するために留学生がいくつかの方策を採っていることがわかった。それはネウストプニーが記述した「外国人のルール違反に対する反応」よりもいくぶん多様である。自分で解釈・理解に努める場合もあれば、不快な気持ちを抱き続ける場合もある。その中に、日本という異文化について理解しようとしても、あるいは納得したつもりでも、結局は不快な気持ちを抱き続けてしまう場合や、不快感を持たないようにするためにその原因となるコミュニケーションそのものを回避してしまう場合などがあることは、留学生の異文化適応を考える際に無視することのできない実態である。

日本人が発する「おいしい」ということばの頻度に気付き、自分も同様の行動をしたほうがいいと思いながらもその行動をとることが「一番の責任のように感じてしまうために、おいしさが感じられなくなる」学生。「おまえ」に込められている肯定的な意味を想像することはできるのだが、「呼ばれるたびに気分が少し悪くなる」学生。つまらないことしか聞かない日本人に嫌気がさして、「一緒に食事に行くのをやめ」た学生。これらの事例は日本という異文化への適応に少なからず苦勞している留学生の様子を示している。

自分が置かれている異文化環境でのコミュニケーションを避けてしまうと、異文化に対する理解を深める機会はおのずと減る。ある時は回避するがある時は回避しない、というように一つの方策として「回避」を使用しているのなら、自分なりに異文化社会における行動をコントロールしているという点で、異文化適応をしていると考えることもできる。しかし、回避する傾向が強くなれば、留学生にとっての目標文化におけるコミュニケーションの機会は一方的に減少し、日本という社会の中での孤立化を招くおそれがある。日本で勉学をする過程で所属するコミュニティには大学、地域社会、同国人の集団、同じ宗教を持つ集団などさまざまなものがあり、いずれかでコミュニティの一員としての意識を保つことが必要である。しかし、時間的・地理的制約のため、あるいは同じ文化圏からの留学生が少ないために、大学内の日本人中心のコミュニティ以外に加わる機会がない学生もい

る。その場合、回避傾向が強くなるということはすなわち日本社会での孤立を意味するのである。

また、回避をした事例を見る限りでは、当該留学生は自分が不快に思ったことに対する検討を十分に行っているとは言えない。自分が経験した不快感が文化の差に起因するものなのではないかという解釈は試みてはいない。文化の違いによるものか、年齢の違いによるものか、あるいは性別によるものか、それとも個性なのか、などという多面的な検討はしていないのである。それに対して、不快な気持ちを表現した事例29の場合、コミュニケーションが終了した後、文化の違いに原因があるのではと考えている。文化の違いのすべてが一般化あるいはステレオタイプ化できるわけではない。しかしながら、「文化の違いかもしれない」と気づけるかどうか、異文化に触れた後の状態に差をもたらしている。

コミュニケーションを回避するに至らないまでも、不快な気持ちを抱き続けることも異文化適応を妨げる要因の一つとなりうる。Wlodkowski(1985)が述べているように、感情というものは思考や行動に大きな影響を与える。人間は知的であると同時に情緒的である。成人学習者の場合、こどもとは異なり、感情を抑えて知的に問題を処理しようとする傾向が強く、またそうすることを期待される場合が多い。しかしながら、成人であってもこどもと同様に「学習中、感情が前向きであれば、課題や活動に興味を持って取り組み続けることができる」(p.54)のである。異文化接触を異文化適応という学習の過程であると考えれば、不快感、日本文化に対する否定的な感情などを抱き続けている留学生に異文化接触への積極的な取り組みは望めない。単なる経験を受け身的に積み重ねるだけで、そこから学習することができないのである。

また、感情的な要因と言語習得との関係も注目すべき点である。文化変容モデルによれば、目標言語文化に対する社会的および心理的な距離が言語習得に影響を与えるということは周知の通りである(Schumann, 1986)。「言語による動揺やカルチャーショックが解決されず、また学習者が十分かつ適切な動機および自我の柔軟性を持たない場合、その学習者は十分に文化適応できず、結果、第二言語を十分に習得できない」(Schumann, 1986, 384)のである。そして、目標言語の習得が思うように進まないためにその環境への適応も遅れるという悪循環をもたらす。今回扱った事例は、日本語の能力がすでに上級のレベルに達している留学生から収集したものであり、感情的な要因が言語習得にどの程度影響を及ぼすのかは不明であるが、少なくとも言語学習への動機付けに与える影響は予想できる。言語習得、異文化適応のいずれを検討する場合でも、留学生の感情的な側面は十分に配慮しなくてはならないのである。

## 5. おわりに

留学生が異文化に接触するときに、どう対応しているのかについて事例をあげ、考察し

てきた。対応のタイプについては、事例をより広く収集することによって検討を続ける必要がある。そして、その上で留学生の教育に携わる者として今後課題にしたいことは、以下の二点である。

まず、異文化に対する気づきをどう高めるかである。先述したように、何かが変わったと思ったり、不愉快だと思ったりしても、それが文化の違いに起因しているのではと推測できる場合とそうでない場合とがあった。各種の異文化トレーニングの手法に学ぶ点が多いと思うが、それと同時に個々の学生がそれぞれの体験を処理する過程で異文化に対する気づきが高められるような方法を探りたい。

次に、文化の違いが理解できたが感情的には受け入れられないという学生にどう対処するかである。知識として「日本人はこうだ」とわかってはいてもどうしても気分が悪くなってしまいう留学生に対して、気持ちの持ちようを変えるように口頭で指導しても効果がのぞめるはずもない。不快な気持ちはそのまま持ちながらも、異文化への取り組みに興味を保ち続けられるような、異文化に触れることは意味のあることだと思えるような指導方法を検討していきたい。

1 熊谷は事例の分類方法の一つとして、以下のようなチェックリストを紹介している。

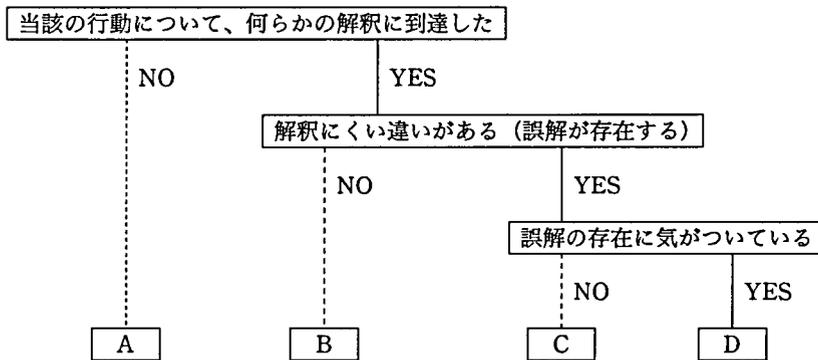


図2 状況による事例分類のためのチェックリスト (熊谷1995, p.89より)

2 もちろん、異なる文化に触れる時の年齢の違いを考えると、外国人留学生をすべてこのタイプに分類できるわけではない。しかし、文化への同化あるいは適応を認知面、感情面、行動面という三つの観点からとらえるという点は留学生の異文化接触を考える上で、大いに参考となる。

3 1998年度前期日本語事情Gの授業を受講していた学生である。日本語の能力はいずれも広島大学留学生センターのプレースメントテストによるレベル4あるいは5 (最高) に達している者。日本滞在の期間は通算3か月から5年の間である。

また、この課題ではなるべく客観的にできごとをとらえることを目的に、三人称で書くよう指示したが、課題の指示が十分に伝わらなかったのか、一人称で書いた学生が何人かいた。

- 4 ここにあげる事例は学生が実際に書いた原文をなるべく生かし、内容をわかりにくくさせている文法的な誤りのみを書き直したものである。文中の名前はすべて仮名とした。また、本研究は留学生の母文化による違いに着目するものではないため、国名もA、Bなどで表わした。

これらの貴重な事例を本研究に使用することを快く承諾してくれた10名の学生にこの場を借りて心より感謝したい。

## 参考文献

熊谷智子 (1995) 「異文化間誤解の事例の検討について－留意点・課題点－」、平成5年度科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書『在日外国人と日本人との言語行動的接触における相互「誤解」のメカニズム－日本語と英・タイ・朝・仏語の総合的対照研究－』、86-100

杉戸清樹、生越直樹、佐々木倫子、早田美智子、堀江プリヤー (1992) 「『誤解』のメカニズムの記述をめざして」『日本語学』 11巻13号、54-63

J. V. ネウストプニー (1982) 『外国人とのコミュニケーション』岩波書店

箕浦康子 (1984) 『子供の異文化体験－人格形成過程の心理人類学的研究－』思索社

横田雅弘 (1997) 「留学生の適応と教育」、江淵一公編『異文化間教育研究入門』玉川大学出版部、67-84

Adler, P. (1975). Their transitional experience: An alternative view of culture shock. *Journal of Humanistic Psychology*. 15(4). 13-23.

Schumann, J. H. (1986). Research on the acculturation model for second language acquisition. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*. 7(6). 379-92.

Wlodkowski, R. (1985). *Enhancing adult motivation to learn: A guide to improving instruction and increasing learner achievement*. CA: Jossey-Bass.